

論文内容の要旨

氏名：加畑聡子

題目：江戸時代医学公教育形成期における経穴学の展開—江戸医学館を中心として—

寛政3年に官立化された幕府直轄の官立医学校・江戸医学館の前身である多紀氏の家塾・躰寿館は、明和2年5代元孝によって創建された。多紀家による考証学の基盤形成の背景には、公教育を担う立場として当時台頭した医学諸派の説を取捨選択し、折衷する試みがあったと推測する。とりわけ鍼灸分野は、学は漢方理論に依拠しながらも、術は外科的側面を併せ持ち、中でも経穴は体表に位置する可視的なものであることから、漢方治療と比して、その身体観及び諸派との相違と影響を明確にする上で有効だが、これまで十分に論じられてこなかった。そこで本論文では、躰寿館及び江戸医学館を医学公教育機関と位置づけ、その設立時期を医学公教育形成期として、教鞭をとった丹波龜山藩医小坂元祐及び幕府医官山崎宗運の経穴学を中心に調査し、検証した。また、諸派の学問及び教育を比較検討することで、公教育機関としての躰寿館および江戸医学館が担う意義役割を明確にすることを試みた。本論文は、前後二編八章に分けて構成した。各編の概要は以下の通りである。

前編は「医学諸派の台頭と医学教育」として、江戸時代の医学公教育形成期の背景にある、医学諸派の台頭と教育の問題について考察した。

第一章では、江戸時代における医学諸派の学問と教育について、経穴学を中心に論じた。

後世派は『素問』『靈枢』を始めとする古医書に依拠して経脈説を重視し、より精確な経穴位置の同定及び取穴法の考案し、切紙を通じて門人へ継承された。古方派の経穴学においては、古人の説を参考するも、後世派が支持した運氣論や経脈説を排し、尺寸に拘泥せず、身体の個体差に配慮し、自らの手指の感覚に従って取穴し、主に口伝によって門人へ伝承していた。漢蘭折衷派は解剖手段による人体構造の理解を重視し、蘭方医・石川元混は、星野良悦による木骨制作を賞賛するものの、実際には門人向けに実用化を図るべく、諸派の説を折衷して取穴していた。

第二章では、幕府医官・望月三英と上総の医者・津田玄仙による医学学校設立の試みを通して、当時における医学教育の諸問題について論じた。望月三英による書物蒐集の背景には、当時の医者に古医方が軽んじられていたこと、古方派の危険思想が拡散することに対する問題意識があり、古医書に依拠した学問を後世に受け継ぐべく、学校設立を試みた。津田玄仙は、上総における医療水準の低下を解決すべく、学校規則及び教育指南書として『勸学治体』を著刊行し、当時の老療中・松平定信に献上するものの、学校設立には至らなかった。両者の学校設立の背景には、医学教育の未確立によって生じる弊害に対する問題意識がある点で一致していた。

後編は「江戸医学館設立期における経穴学」として、小坂元祐（第三～四章）と山崎宗運（第五～第八章）の業績を通して、医学公教育形成期における考証学について考察した。

小坂元祐は、難解な考証による経穴書を、簡便な『十四経發揮』を底本として初学者に配慮した形で『愈穴捷徑』『経穴纂要』として、著述、出版し、広い教育対象層へ啓発した。元祐は師説や臨床経験を根拠とするような主観的意見を抑制することで、古医書及び注釈家の説に依拠した客観的な教育を求めていた。『十四経發揮』を底本とし、種々の古医書や解剖の活用によって考証を試みた元祐の営為は、当時の医学における臨床と理論の一致を目的とした、一つの折衷の態様であり、当時における公教育の特質と見なした。

山崎宗運は、当時の医者が『靈枢』を通曉せずにとり穴を行っていたこと、古今の尺度に相違があること、身体に個体差があることに対する問題意識を持ち、『靈枢』に依拠しながらも個体差に応じた取穴が可能な「骨度折量法尺式」を制作することで、より実証的かつ実用性の高い取穴法を体現した。『天聖銅人腧穴鍼灸図経彙攷』における校正補註にあたっては、古医書のみならず、解剖学的知識を重視することで、より具体的な取穴法を理解と、実践への活用を試みていた。また、「銅人形」制作においては、身体各部の尺寸は『靈枢』の記載を、経穴位置は日本医家の説を、人体には解剖学的知識を取り入れて、一説に拘泥せず多角的に考証することで、より精確性の高い経穴位置の同定を試みたのである。

以上の小坂元祐及び山崎宗運の事績は、医学公教育の立場として学問の正当性を提示するべく、客観的視点に立脚した折衷手法に基づく実証性の高い考証を試みたという点において一致していた。諸派の説を踏まえて取捨選択することは、精確性の追求のみならず、より多くの医者に学問の受容、継承を促す意図があったと見なした。躰寿館ならびに江戸医学館が公教育機関としての医学の正統性を主張すべく、客観性をもって諸派の説を折衷し、考証によって実証性を追求したのである。これらの事績は、江戸時代の医学公教育形成における必然的かつ必要不可欠な特質と言えよう。